

エクスカーションHの反省点

鳥取環境大学 新名阿津子

ツアーコース

鳥取県西部総合事務所→道の駅羽合（トイレ休憩）→都市緑化フェア（湖山池）
→昼食（賀露港）→鳥取砂丘（鳥取砂丘ジオパークセンター、鳥取砂丘、砂の美術館）→分科会（車内）

ガイド・スタッフ：6名（内、現地ガイド2名）

配布資料：巡検案内（鳥環大教員3名で執筆）

ジオパーク，鳥取砂丘，浦富海岸を解説

■今回のコースで、エコツアーガイドとして苦勞したこと

（1）時間配分

米子から鳥取へ移動し，そこから大山へと戻るルートであり，長時間移動を危惧したが，実際，米子から鳥取への移動が予定時刻を超過したため，非常にタイトな時間配分となった．米子から鳥取へのツアーの場合，汽車移動も考慮されてはいかがだろうか？

（2）天気

小雨がぱらつく天気であった。都市緑化フェア会場では，到着前に雨が降り始めたので会場で傘を用意してもらったが，到着時にはやんでおり，傘を借りずにツアーを続行した。途中，小雨が降り出したが傘を参加者に渡す事ができなかった。一方，鳥取砂丘内は雨が降っているため非常に歩きやすかったが，砂丘を特徴付ける風紋が観察できなかった。砂丘ジオパークセンターでは風紋の成立条件について解説を受け，当日は悪条件であったことを認識したと思っ

たが、ツアー後に「風紋が見たかった」という感想がでた。これに対し、解決策が必要であろうか？

(3) ツアー設計とツアータイトル

本ツアーのガイド依頼を受けた時には、ルートとツアータイトルが決定しており、こちらの自由度が非常に低く、その中でジオパークのメッセージを伝える事に非常に苦労した。また、当初案では浦富海岸まで含んでおり、一カ所をじっくりと歩くというよりも、複数箇所を急いで周遊するルートであった。ツアータイトルには「雄大な砂丘」や「ときめく」「世界ジオパーク」などのキーワードが入っているが、ジオツアーのタイトルとしては何を訴えたいのか分からない。ゆえに、当ツアー設計時にガイドが参加するか、そうでなければ、ルートやタイトル作成者がもう少しジオパークについて理解されることを期待したい。

■エコツアーガイドとしての自己改善点（「次はこうしたい」など）

(1) (改善点の前に良かった点) コミュニケーション

参加者とのコミュニケーションを重視したガイドを行い、これについては概ね好評であった。ただ単に一方的に話すのでは意識に残らないものでも、会話を通じて一度「考える」という行為を行う事で、参加者の意識に少なくともわずかなインパクトを残す事ができるのではないだろうか。また、参加者にどんどん発言してもらおう事で、場の一体感を醸成できる。最終的には参加者間で会話が見られるようになり、この点では非常に満足できる内容となった。

ただし、これは少人数で行う場合にのみ有効である。20名以上となると、参加者一人一人とのコミュニケーションが難しくなる。ちなみに、今回のツアーはコミュニケーションを取るには適正規模であった。

(2) 改善点：ツアー設計

先述の通り、ツアールート設計においては不十分であったと考える。砂丘を巡るルートであれば、末恒、湖山、浜坂、福部の4砂丘のジオストーリーを巡るツアーを行いたい。特に、この時期は福部砂丘でラッキョウが育っている風景を見る事ができる。また、海岸沿いにある「飛砂注意」は砂丘地特有の看板

である。さらに、都市化した湖山・末恒を見るには湖山池青島の展望台が最も良く観察できる。さらに、近くには吉岡温泉があり、断層との関係（温泉、鳥取地震、砂丘開発）などのストーリー展開も可能である。足湯につかりながら、ガイドや地元の人と話す事などもできたであろう。そうすると、新しいツーリズムが目指す個人的経験・体験を重視した内容となるのではないだろうか。

■今後、今回のコースを商品化していくにあたって必要だと思うこと。（課題の解決に必要なと思うこと）

（1）ツアー企画者のジオパークへの理解

再三述べている通り、ジオパークでのツアーを企画する場合は、少なくとも企画段階でジオパークを理解している人が入っている事が必要である。ジオパーク自体、新しい取り組みなので誤解される面を持っている。例えば、「ジオパーク＝地質公園」という誤解である。これは世界ジオパークネットワークも「ジオパークは地質公園ではない」と指導している。もちろん、「砂丘に行くからジオパークのツアーだ」というのも誤解である。

ジオツアーは風景の美しさを感じるだけのものではない。そこから自然環境や文化と地球の関係を考えてもらうツアーである。そして、ジオツアーを行う際、ジオパークが伝えるメッセージを参加者に伝え、考え、共有し、次のアクションへと繋げなくてはならない。これができていないがために、ジオパークの品質を下げる事例も実際にある。ゆえに、ジオツアーを商品化するには、まずはツアーを企画する段階で企画者がジオパークを理解することが必要である。

（2）何を伝えたいのか？

参加者からの意見に「もっと地元の人との会話が欲しかった」、「時間が短い」などがみられる。エコツーリズムやジオツーリズムのような新しいツーリズムは、個人的経験や体験を重視する。今回のエコツーリズム国際大会のテーマである「住まうように旅をする」というのも、個人的経験や体験を重視したものではないだろうか。その中で、地域の何を彼ら/彼女らにメッセージとして受け取ってもらいたいのか。それを今一度、再考する必要があるように思う。